

第1日 5月26日(土)

口頭発表：文学 I (14:30～17:45)
A 会場 (36 号館 382 教室)

司会：江口 大輔・前川 一貴

1. ヨーハン・ザロモ・ゼムラーの『旧約聖書』解釈と同時代への影響

土屋 京子

聖書を文献学的批評分析の対象とするという営みは、もちろん聖ヒエロニムスやニュッサのグレゴリオスなどの釈義にまで遡ることができる。しかしながら聖書から哲学的かつ美学的な主題を読みとり、さらにはその文学性にまで踏み込んで論じるようになった転換点は、大学という研究の現場で神学が人文科学研究から分離されることによって訪れる。すなわち 18 世紀啓蒙主義の時代、ハレ大学神学部教授であった J. S. ゼムラー (1725-1791) は、同大学のヴォルフ学派ならびに員外教授バウムガルテンの詩学の影響を受けつつ、『創世記』の文学性を文献学の見地から照査しており、近代の神学的転換をもたらしたひとりである。しかしこれまでドイツ語圏においては、聖書の詩的側面を細やかに分析した先がけは J. G. ヘルダーの『ヘブライ文学の精神について』(1782) であると理解されてきた。確かに、後世への直接的あるいは間接的影響関係などの労を多とするのであれば、それは間違いではない。だがゼムラーの *Abhandlung von freier Untersuchung des Kanons* (1771) では、すでに聖書の比喩的解釈を文学の領域へと移して論じている。たとえばこのなかで原罪は、歴史的事実でも、また人の生涯における苦悩や労苦を根拠づけるもの、あるいは神の恩寵とイエスの贖罪という教義の明るさを際立たせる闇でもなく、寓話あるいはアレゴリーであると解釈されている。

ゼムラーは晩年、とりわけ 1788 年の宗教の検閲令を境にして保守的な合理主義者へと転向したために、同時代人の評価は低かった。このような評価が尾を引いてか、現在においても彼の仕事はほとんど等閑に付されている。本発表においては、ゼムラーの生涯にわたる数々の矛盾には触れず、初期の主著 *Abhandlung von freier Untersuchung des Kanons* (1771) のみを扱うことで、本書を神学と言語学や文学研究との重要な分水嶺のひとつと位置づけることを目指している。

2. 『新エロイーズ』とシュトゥルム・ウント・ドラング — 1774 年における受容の一断面

今村 武

ルソーの影響無くして、シュトゥルム・ウント・ドラングの若き詩人の鮮烈なデビューは考えられない。本発表は、ルソー受容を通じて若き詩人に醸成された反抗と革新を志向する文学的共和主義とも呼び得る新しい文学構想を明らかに

する。その際特に1774年の疾風怒濤の代表作『若きヴェルテルの悩み』と『家庭教師』に着目し、ゲーテとレンツの詩論的・創作方法上の独自性も示す。ルソーの影響に関する研究は、ゲーテはもちろんレンツも取り上げている。本研究は、疾風怒濤の作品群中で直接言及される書簡体小説『ジュリまたは新エロイーズ』(1761年)を軸に、シュトゥルム・ウント・ドラング最初の頂点1774年のゲーテとレンツによる二つの作品に絞り込み、その影響を検証する。『ヴェルテル』と『家庭教師』の悲劇的と喜劇的な終幕は、両者で異なるルソー受容の内実を示すばかりではなく、従来の研究において男性中心主義を指摘されてきたシュトゥルム・ウント・ドラングの、男性主人公を中心とする高揚感漂う終幕が、彼ら自身を批判し、相対化する構造を有していることも指摘出来る。また『新エロイーズ』の影響を濃厚に示す1775年のクリンガー『悩む女』や翌1776年のヴァーグナー『嬰兒殺し』における、ルソー的な自然回帰と社会批判にも言及し、多岐にわたるルソーの影響圏を改めて検討することで、シュトゥルム・ウント・ドラング研究の一端としての役割を果たしたい。

3. 詩人・ハイネ再考 — 『歌の本』と《詩人の恋》を手がかりに

野口 方子

ハインリヒ・ハイネは、文壇デビュー初期の抒情詩人という側面と、後の社会派散文作家としての側面のそれぞれで、いわば別ものとしても捉え得るが、時期による信念や作風の変化はあるにせよ、そこまではっきりと区分して受容してよいものなのか。初期の抒情詩の中にも「イロニーの仮面 *die Maske der Ironie*」の背後に隠された社会への懐疑が垣間見られるという点に注目し、ハイネの詩作品が内包するイロニーについて改めて考察したい。

ハイネの詩において、悲嘆に暮れた詩人は己の素の表情を見せないように「イロニーの仮面」を用いている、と論じたのが、ハイネと同時代人の作曲家ローベルト・シューマンである。作曲家であると同時に文筆家としても積極的に活動していたシューマンもまた、時代の風潮に対して思うところは当然あったろう。そのシューマンが、スノビズムに対するハイネのイロニー的な態度を抒情詩から読み取り、それを共有した上でハイネの詩に曲を付けていることの意味を再検証することで、詩人としてのハイネの価値を改めて見出すことになる。そこで本発表では、ハイネを世に知らしめた『歌の本』に注目し、殊にシューマンが《詩人の恋》として16篇の詩(初稿版では20篇)を採り上げた「抒情的間奏曲」を中心に、シューマンの手稿譜も参考にしつつ、ハイネの詩が持つイロニーについて再考する。

4. 噂の変身 — クリストフ・ランスマイヤーの『最後の世界』における構成原理としての「ファーマ」

吉川 侑里

本発表が対象とするクリストフ・ランスマイヤーの小説『最後の世界』(1988)

は、これまでそのメタフィクション性 (Eppel, 1992) や現実／虚構の明確な境界の喪失 (Theisen, 2006) という特徴により「ポストモダニズム文学」として高い評価を得てきた。本作品はオヴィディウスの『変身物語』や、追放期の『悲しみの歌』、『黒海からの手紙』をもとにして書かれていることも度々言及されている。しかし、土台となっている古典作品と本作品のインターテクスチュアリティ関係について、まだ十分に論じ尽くされたとはいえない。そこで本発表は、先行研究の中で物語の口承性の表れとして指摘されるにとどまってきた神話形象「ファーマ」に焦点を当てつつ、そのインターテクスチュアリティを論じる。「ファーマ」は『最後の世界』の中で単なる噂の擬人化ではない。作中では、「ファーマ」の神話の特徴である、虚構（「噂」）と真実（「知らせ」）の二重性として最大限に生かされて、ポリフォニックな小説空間を用意する装置としても機能している。ランスマイヤーは「ファーマ」を介在させることによって人々の「話」を真偽の間に宙づりにする構造をつくりあげ、オヴィディウスの古典作品を文字通りにトランスフォーメーションさせて、『最後の世界』を徹底的にポストモダンな作品に仕上げているのである。

5. トーマス・ベルンハルト作品における女性像について — 『ウィトゲンシュタインの甥』を中心に

飯島 雄太郎

本発表では、ジェンダー論の観点からトーマス・ベルンハルト (1931-1989) を論じる。ベルンハルトの作品は女性嫌悪を強く示す男性の長広舌によって物語が進展することから、その男性中心主義的な性格が批判の対象となってきた。こうした研究動向に一石を投じたのが、Verena Ronge である。Ronge は、登場人物の性差別的な振る舞いをアイロニーとして捉え、ステレオタイプなジェンダー観を攪乱する可能性をそこに認めている。

本発表では『ウィトゲンシュタインの甥』(1982) を取り扱う。本作の女性像を検討することを通じて、Ronge の論に修正を加えることが狙いである。

本作は、生涯の大半を精神病院で過ごした人物パウルと、肺病患者の語り手という、二人の病者の友情を書いた作品である。パウルの狂気を描写する際に、重要な役割を果たすのがその感傷的な性格である。こうしたパウルの描写に、Ronge 的な意味での攪乱性をみることも可能だろう。

他方、病の男性の友情を中心に据えた本作において、女性は男性を庇護する存在として書かれている。本作において男性ジェンダーの弱さを描くことが、結果的に「母」としての女性への依存を正当化することにつながっているのである。その限りにおいて、ベルンハルトの女性像は、あくまでも旧来の性別役割分業の枠内にある。その攪乱性もまた、あくまでも男性中心主義的なイデオロギーの枠内における攪乱であるということができよう。

口頭発表：文学 II (14:30~17:05)
B 会場 (36 号館 581 教室)

司会：松永 美穂・Arne Klawitter

1. 日本の新興人形劇ファウストと独文学者

山口 遥子

ゲーテ生誕 200 年にあたる 1949 年、人形劇団プークによって大規模人形劇『ファウスト博士』が日本全国で上演された。森鷗外を通じて歴史的なファウスト人形劇の存在を知っていた独文学者の多くにとって、これが初めて目にするファウスト人形劇であったと思われる。日本では 1920 年代から二〇世紀初頭ドイツの「人形劇ルネサンス」の影響の下「新興人形劇」と呼ばれる運動が興っていた。プークの『ファウスト博士』実演はこの人形劇運動の集大成であったのみならず、日本の独文学者に対し、ファウスト文学の民衆性について新たな洞察を与える出来事であったと言える。

久保栄の助手を務めた川尻泰司が率い、村山知義のアトリエで人形制作活動を始めたプーク (1929 年創立) は、大正新興美術運動および新劇運動とも深く関わる。久保栄は「木村謹治ら主流派と対立して、現実的・階級的視点から大胆にゲーテを解釈しファウストを考察した」と井上正蔵に称えられたが、歴史的な人形劇についての判断は「主流派」に準じた。対してプークはファウスト文学の持つ民衆性を改めて強調するために、ゲーテ版と歴史的な人形劇版の折衷台本を創作し『ファウスト博士』を上演した。これを高く評価した独文学者の一人に、久保栄が先達として仰いだ舟木重信がいる。ファウスト文学が、大衆のために創られ演じられる「人形劇」という形式で現実化されたことによって、ゲーテのファウストが持つ民衆性が改めて生き生きと日本の独文学者に伝えられたという事実を、劇団外部には非公開だった原稿・資料等をも用いて明らかにする。

2. 世界といかに闘争するか — 決断主義思潮圏におけるエルンスト・ユンガールの位置について

糸瀬 龍

「決断主義 *Dezisionismus*」と称される 20 世紀初頭の思潮がある。クロコウ (Ch. Graf v. Krockow: *Die Entscheidung*, 1958) は、ユンガー、カール・シュミット、マルティン・ハイデガーの三人を「決断 *Entscheidung*」のタームで括って論じ、現在決断主義と呼ばれるものの素地を作った。そもそも「決断 (決定) 主義」とは政治学の術語であり、20 世紀に限れば、ヴァイマル共和国期に議会主義批判を展開したシュミットのテーゼ (例外状態について決断を下す者が主権者である) に付されるはずのものであった。クロコウ以後に両大戦間期の哲学的過激思想中の一つの潮流として「決断」の問題を正面から論じたボルツ (N. Bolz: *Auszug aus der entzauberten Welt*, 1989) においても、決断主義におけるユンガールの位置が、シュミットの論との差異に着目して十分に展開されたとは思われない。これら

の先行論において、ともすればユンガーは、ヴァイマル期議会主義への批判としてシュミットが展開した上記テーゼの一端を担う論者として捉えられてきたともいえるだろう。

これらを前提に本発表では、決断（主義）がユンガーの思想にどう関わるかを問う。手がかりは、ユンガーが『総動員』（*Die totale Mobilmachung*, 1930）で用いた *Entschlossenheit* の取り扱いである。ハイデガーの用語でもあるこの語は *entscheiden* と並んで決断主義を代表すると見なされてきた。ユンガーは後年、著作集（E. Jünger: *Werke*. 1960-1965）あるいは全集（E. Jünger: *Sämtliche Werke*. 1978-1993）に『総動員』を収録する際、この語を *Gläubigkeit*（篤信）で置き換えている。この書き換えはユンガーのテクストにおいていかに作用するのか。発表では、シュミットの論との比較考察を視野に入れつつも、いわゆる決断主義におけるユンガー独自の思想の展開を解明することが目指される。

3. Demenz und Gender. Roswitha Quadfliegs Roman *Neun Monate. Über das Sterben meiner Mutter*

Monika Leipelt-Tsai

In Roswitha Quadfliegs Roman *Neun Monate. Über das Sterben meiner Mutter* von 2014 wird das Narrativ von Demenz ganz neuartig mit der Erzählung von weiblicher Identität verknüpft und das Problem der Alterität in mehrfacher Hinsicht ausgelotet. Quadflieg verquickt verschiedene Formen der Alterität, wenn die Erzählung mit der exotisch anmutenden Umgebung im Suq von Marrakesch beginnt. Die Angstattacken der Protagonistin neun Monate vor deren Tod lösen das Schreiben der Icherzählerin aus, welche die Transformationsprozesse der Figur „Mutter“ begleitet und in Sprache zu fassen versucht. Mit der Protagonistin spielt Quadflieg direkt auf die damals 92jährige Mutter der Autorin an, eine Aristokratin aus Schweden. Diese bewegt sich am Lebensende in einer Alternativwelt zwischen Realität und Imagination. Ihre Identität beginnt ambivalent zwischen verschiedenen Rollen ihrer Vergangenheit zu schwanken. Schließlich wird sie selbst zu einer Fremden mit dem bezeichnenden Namen „Frau Anders“, wenn sie im neunten Monat Befehle auf Schwedisch gibt (vgl. ebd. 158). Eine Identifikation mit der befremdlich rätselhaften Perspektive der Mutter erscheint schwer möglich, doch Quadfliegs Icherzählerin erhält deren Würde aufrecht. Vormalig eine Zeitspanne der menschlichen Entwicklung zum Leben, wird der Topos der neun Monate verkehrt und auf eine unheimliche Entwicklung zum Tode verschoben. Demenz zerstört nicht nur, sie entwickelt auch eine Produktivität.

4. Autofiktionale Texte und Narration zwischen Erinnerung, Gegenwart und Zukunft in der deutschsprachigen Gegenwartsliteratur: *Der Spaltkopf* und *Tauben fliegen auf* als Manifeste des Wandels

Agata Joanna Lagiewka

Der Vortrag zielt darauf ab, Entwicklungen deutscher Gegenwartsliteratur anhand der Romane *Spaltkopf* von Julya Rabinowich und *Tauben fliegen auf* von Melinda Nadj Abonji darzustellen. Die vertretene These soll aufzeigen, wie die gewählten

Schriftstellerinnen mittels der Wahl ihrer Narrative diasporische Existenzen zwischen den Kulturen und als transkulturelle Identitäten literarisch in autofiktionalen Texten konstruieren.

Der Preis von Assimilation, das Trauma der Migration und der Wunsch nach einer Verankerung wird von allen Exilgenerationen geteilt und durch Schweigen und Verschweigen als Überlebensstrategie manifestiert. Dargestellt werden soll, wie mittels sprachlich explizit in die Innenwelt gekehrten Akteuren der Leser die Möglichkeit erhält, fragmentierte und hybride Identitäten durch den Verlust der Heimat, gewohnter Traditionen, Beziehungen und Sprache zu erkennen.

Diese innere Zerrissenheit und Gespaltenheit soll im Vortrag exemplarisch anhand der gewählten theoretischen Grundlagen dargelegt werden. Die Darstellungsweise der genannten Narrative entspricht der Theorie der Erinnerung von Aleida Assmann, von Mythos und Bedeutung der Theorie von Claude Lévy-Strauss sowie Cathy Caruths Theorie von Trauma, Narration und Geschichte. In Folge thematisiert dieser Vortrag, wie transkulturelle Identitäten im deutschsprachigen Raum unter Beachtung der Genre-Theorien des autobiografischen und autofiktionalen Schreibens von Philippe Lejeune und Serge Doubrovsky auf narrativer Ebene reflektiert werden.

口頭発表：語学（14:30～16:25）
C会場（36号館 681教室）

司会：石井 道子・室井 禎之

1. 18世紀オーストリアにおける文章語の「標準化」
— 『ウィーン新聞』に基づく計量的研究

鯨岡 さつき

18世紀オーストリアでは、上部ドイツ語的変種が東中部ドイツ語的標準変種に取って代わられるという、文章語の「標準化」が起きた。発表者はこの「標準化」プロセスを明らかにするために、I. 1720年、II. 1750年、III. 1780年、IV. 1810年、V. 1840年の5つの時期に関して、オーストリア国立図書館が公開している『ウィーン新聞』のデータを収集し、「ウィーン新聞コーパス 1720-1840」を作成した。18世紀（I～III）の対象データは全885号で、総語数は約710万語となっている。19世紀（IV, V）は各月2号ずつ、計138号を対象にし、総語数は約456万語である。この新聞コーパスをもとに、例えば接尾辞-nus/-nis、副詞および接頭辞の *zuruck/zurück* についてそれぞれ10万語あたりの調整頻度を調査すると、18世紀中盤（II）までは-nus および *zuruck* が優勢であったのに対し、18世紀中盤（II）から後半（III）にかけて標準化が急激に進み、18世紀後半（III）においては標準変種の-nis と *zurück* が圧倒的に優勢となったことがわかる。また続く19世紀（IV、V）には、-nus と *zuruck* はほぼ根絶された。

18世紀後半に標準化が急激に進行した理由としては、1740年の即位以来国民教育に力を注いだマリア・テレジアが、東中部ドイツ語的標準変種を範にしたゴットシェート（およびその系列）の文法書を学校に指定したことが関連していて、この言語政策的な方針決定が『ウィーン新聞』の書き手たちの言語使用に影響を及ぼしたと解釈できる可能性がある。

2. *sein* を完了助動詞に選択する動詞が取る対格名詞句の統語的位置

藤井 俊吾

一般に完了助動詞として *sein* を選択するのは状態変化や場所移動を表現する一部の自動詞のみとされているが、Grewendorf (1989: 9)等が指摘している様に、*durchgehen* などの一部の動詞は対格名詞句を取りながら *sein* を完了助動詞に選択することが知られている。こうした対格名詞句は受動文の主語への昇格が可能であることから、動詞の目的語、つまり内項であると判断されて来た。*lesen* などの対格目的語を取る動詞に比べ、*durchgehen* などの動詞は *nochmal* を副詞に取る場合に可能な解釈が異なることから、本発表では *sein* を完了助動詞に選択する動詞が取る対格名詞句は内項ではなく経路や着点を表現する副詞の位置にあると主張する。例えば、(1)*Nachdem ich einen Plan gelesen habe, habe ich nochmal eine Liste gelesen.* という文では、「私」が予め「リスト」を読んでいなければ文は意味的に誤りとなるが、(2)*Nachdem ich einen Plan durchgegangen bin, bin ich*

nochmal eine Liste durchgegangen. という文では「私」は予め「リスト」に目を通していなくとも意味的に問題はなく、よって **nochmal** のスコープに対格名詞句は入らずとも良いことが分かる。他動詞文の場合、結果状態のみを含む場合を除くと **nochmal** のスコープは(1)の様に目的語を含むことになるが、(2)は文脈によらず発話が可能である為に、(2)の対格名詞句は内項ではなく副詞として導入されていると考える。また能動文では移動者が必ず内項として実現する必要がある為に他の要素は目的語としては実現し得ないが、受動文では移動者が **Passive Voice** によって導入される為に、経路等を表わす名詞句が内項として実現可能となり、受動文の主語として昇格出来ると主張する。

3. ドイツ都市部に暮らすトルコ系移民の言語使用と言語意識 ー アンケート調査から見た彼らのアイデンティティ

田中 翔太

発表者は、2017年にドイツの15都市でトルコ系移民の三世代を対象にアンケート調査を実施した。トルコ系移民を対象としたアンケート調査には、Polat (1997) や林 (2001, 2003, 2008) 等があるものの、発表者のアンケートのように、複数都市で第一世代から第三世代までを対象に行った研究はまだ存在しない。本研究発表の目的は、日常生活における言語使用状況（誰がどの場面で誰に対して何語を用いるのか）、ドイツ（語）・トルコ（語）に対する考え方、教育と宗教に関わる背景（どのような教育歴があり、どの宗教を信仰しているのか）に関してアンケート結果を統計的に解析することによって、ドイツ都市部に暮らすトルコ系移民の言語意識と言語使用の関係性を明らかにすることである。

解析結果の要点は、次の3点に集約することができる。1) トルコ系移民の中でも若い世代ほど、日常生活におけるドイツ語使用が増えている。2) 若い世代のとりわけ女性が、トルコ系移民全体の言語運用能力の底上げを行っている。それに対し世代が上がるほど、女性の日常生活におけるトルコ語使用が増える。3) 第一世代から第三世代まで全世代を通して、トルコ語の学習・維持が重要であるという意識を持っている。ドイツ語の使用率が高い回答者であっても、トルコ語の使用や他のトルコ系移民との接触を重要視しており、それを通じてトルコへの帰属意識を感じている。

口頭発表：ドイツ語教育（14:30～17:05）
D 会場（36 号館 582 教室）

司会：岡山 具隆・星井 牧子

1. Form ohne Fokus – Sprachliche Qualität im inhaltsbasierten Anfängerunterricht

Olga Czyzak

In einem aufgaben- und inhaltsbasierten Kurskonzept stellt sich die Frage nach dem Stellenwert der sprachlichen Formen im Unterrichtsgeschehen. Doch auch wenn im Lehrplan keine grammatische oder funktionale Progression verankert ist, sind Lernende in der Lage ihre sprachlichen Fähigkeiten in der Interaktion anzuwenden und weiterzuentwickeln. Das Fremdsprachenlernen wird zu einem aktiven Prozess, bei dem grammatische Operationen hinter die inhaltliche Bedeutung treten und vom zentralen Lerngegenstand zu einem Vehikel der Interaktion werden.

In diesem Beitrag sollen die Ergebnisse einer unterrichtsbasierten Studie mit Fokus auf die sprachliche Entwicklung vor dem Hintergrund eines kognitivistischen Ansatzes vorgestellt werden. Die Grundlage der Untersuchung bildet der audiographierte und transkribierte Unterrichtsmitschnitt aus acht Sitzungen eines themenbasierten universitären Anfängerkurses gegen Ende des ersten Studienjahres. Das Transkript wurde in sprachliche Analyseeinheiten unterteilt und anhand ausgewählter Aspekte in Bezug auf Komplexität und Korrektheit analysiert. Die Ergebnisse der Untersuchung machen einerseits deutlich, dass Lernende sich bereits auf dieser frühen Stufe über fachspezifische Themen austauschen können und dabei vielschichtige Gedanken zu längeren Redebeiträgen verknüpfen. Andererseits zeigt sich, dass die mündlichen Beiträge der einzelnen Teilnehmer im Vergleich untereinander, aber auch abhängig von der Tagesform der einzelnen Studierenden, in Bezug auf die sprachliche Qualität große Unterschiede aufweisen.

2. 統合講座の新たな展開 —〈第二文字学習者〉とは誰か

井上 百子

本発表では、ドイツの統合講座に、2017年「第二文字学習者（Zweitschriftlernende）」のための講座が新たに開設されたことに着目し、同講座の開設が統合講座開設時に想定された受講生と現在の受講生との齟齬を、現行の枠内で埋める一つの方法であることを明らかにする。

最初に確認したいのは、政策としての統合講座に起こった変化である。統合講座は、もともと EU 市民や Aussiedler を主な対象者と想定し、2005年に始まった。そして2015年10月に、一部の庇護申請者に参加の門戸が開かれた。これに伴い、参加者の文化背景および学習歴に大きな変化が生じている。連邦移民難民庁（BAMF）の統計からは、非識字者の割合が飛躍的に増えていることが読みとれる。

この対応策の一つとして、BAMF は昨年4月、第二文字学習者講座のコンセプトペーパーを発表した。そこで〈第二文字学習者〉は「ローマ字を使用せぬ言

語の読み書きが円滑に運用できる者」と定義される。また同講座は、一般統合講座よりも学習速度が緩やかに設定されている点に特徴がある。

実際の講座参加者に目を向けると、ローマ字の読み書きができて、600 コマ (1 コマ 45 分) で A1-B1 を習得するという学習速度について来られない者は、一般統合講座にも一定数存在している。その意味では、第二文字学習者に限りなく近い学習者は決して少なくない。本発表では、授業実践と教材の分析を通して、上述の学習者が抱える困難を考察し、一定以上の学習歴をもつ者と非識字者のあいだに位置する第二文字学習者とは、どのような学習者なのかを検討する。

3. 日本人ドイツ語学習者における L1 ライティング能力と L2 ライティング能力の関係性

山田 真実

従来、第 2 言語習得研究の領域では、L2 ライティングの際の L1 使用は避けるべきものとして否定的に考えられてきた。そのような態度の根底には、L1 から L2 への負の転移 (干渉) が起こることへの懸念がある。しかしながら 1980 年代以降、学習者の L1 使用は L2 ライティングに必ずしもネガティブな影響を与えるわけではないこと (Mohn and Lo 1985)、さらに学習者は L1 ライティングで使用するストラテジーを L2 で作文を執筆する際にも用いるという正の転移を主張する調査結果 (Arndt 1987; Cumming 1989) も現れた。上述のように L2 ライティングにおける L1 の影響について調査は為されてきているものの、L1 ライティング能力と L2 ライティング能力の関係性を直接取り上げた研究はほとんどない。上記の先行研究を踏まえた上で、本調査は以下のリサーチクエスチョンを立てた。①L1 ライティング能力と L2 ライティング能力との間に相関性はあるのか②同一の書き手が執筆した L1 作文と L2 作文のテキストとの間に類似性は見られるか。①については、日本人ドイツ語学習者 20 名 が執筆した L1 作文と L2 作文を評価項目に従って採点し、評価結果を相関分析にかけた。②については①と同じ被験者を対象とし、同一の書き手が執筆した L1 作文と L2 作文のテキストの特徴を比較した。結果、日本人ドイツ語学習者の L1 作文の評価と L2 作文の評価との間に有意な相関は見られなかったものの、同一の書き手が執筆した L1 作文と L2 作文には類似点が見られ、学習者は自身のテキストの特徴を両作文の間で転移させていることが示唆された。

4. ドイツ語発音における Kernmerkmale -- コミュニケーションの観点から見た身につけるべき発音の力

中川 純子・立川 睦美

近年、欧州評議会の提唱する複言語主義のスローガンの下、日本の高等教育機関におけるドイツ語教育のコースプランも伝統的な文法・読解力重視型からコミュニケーション力重視型へとシフトしてきている。しかしながら、コミュニケーションにおいて最も重要な要素の一つとなる発音に関する指導が積極的かつ

体系的に行われることは稀である。原因として授業時間不足、教員自身の意識の低さなどがしばしば挙げられるが、問題の根本はそもそも妥当な学習範囲や具体的な到達目標が想定されていないことにあるといえる。カタカナ読みでよいと考えれば発音指導はおざなりになり、反対に母語話者並みの発音をめざせば非現実的な目標となって早い段階で試みが頓挫してしまいがちである。

J. ジェンキンスはリンガフランカとしての英語の発音の学習に際し、「非母語話者同士の会話において互いの理解を保障する発音上の要素」となる **core items** を習得することの重要性を主張し、Jenkins (2002)で項目のリストアップを行っている。本発表ではジェンキンスに依拠し、日本のドイツ語学習者がめざすべき発音上の習得目標として **Kernmerkmale** を提案する。**Kernmerkmale** は日本におけるドイツ語学習の位置づけから、日本人がドイツ語話者と会話する際に「コミュニケーションを成功させるための最低限身につけるべき発音上の要素」と定義される。本発表では **Kernmerkmale** を特定する具体的方法および実際にリストアップされた **Kernmerkmale** を報告する。また、**Kernmerkmale** を取り入れた教材の開発およびシラバスや評価システム構築の可能性についても議論する。

口頭発表：文化・社会（14:30～17:05）
E会場（36号館 682教室）

司会：荻野 静男・小野寺 賢一

1. ゲオルギアーデスの音楽論におけるシューベルト・リートの「言語 (Sprache)」について

添田 久美子

ギリシア出身のドイツの音楽学者 T. G. ゲオルギアーデス(1907-1977)は、楽音 (Ton)と言語音(Sprachlaut)を身体 (Körper) の有無によって区別した。それによれば、楽音は道具によって作られ対象化されるがゆえ身体を持ち、一方言語音は人間の自己と同一であるがゆえ人間的なもの(das Menschliche)という表現素材を持つが、それは行為と内容であり身体を持つとは言えない。またシューベルト・リートは言語の論理(ドイツ韻律法)によって規定されているがゆえ楽音であるよりもむしろ言語音である。言語音としてのシューベルト・リートに具わる人間的な表現素材を対象化しうるために、つまり身体を与えるために必要なのは「言語」の構造である。ゲオルギアーデスの意味する言語の構造とは一体何か。それは音楽とどのように関わるのか。シューベルト・リートが歌われる時、それが直接語られる、つまり言語であると私たちに知覚させる何かが働いていると考えられ、その何かはゲオルギアーデスが言語をいかに捉えているかを明確にすることで導き出されると考える。*Rhythmus – Sprache – Musik* (2007)において W.オストホフ、H.-J.ヒンリッヒセン他は、ゲオルギアーデスが追究し続けた楽曲分析の重要性と、また西洋音楽史を音楽と言語の関わりによって変化生成するものと見なすことを受容しているが、彼が何よりも優位に置いた言語に対する理論的解釈は曖昧なままである。したがって本研究はゲオルギアーデスの言語の概念を解明することを試みる。

2. 怪異に対する本能的畏怖についての現象学的ディスクール
— オットー、フロイト、ユクスキュルを中心に

渡邊 徳明

ルードルフ・オットーによれば、ヌーメン(神霊的なもの)は「戦慄すべき神秘」であり、異他感を呼び起こすものである。それは情動に起因する。このように宗教的感情を合理的に説明しようとする背景には、20世紀前半における社会の脱神話化的傾向があっただろう。信仰を現象学的に理解するなら、無数のア・プリオリな主観が超越論的に共有する客観によってヌーメンが裏打ちされる状態となろう。

ヌーメンは怪異的にも見えようが、ただ怪異は間主観的には共有されず、客観によって存在の有無が保証されず、それゆえ主観的存在であるかすら分からないものであると発表者は考える。異他感が曖昧で、自己の領域にも他者の領域にも位置づけ不能なのが現代における怪異である。

ヌーメンであれ怪異であれ情動に起因するなら身体感覚と不可分である。怪異は己の心身に同化したと予感される「異」なる「何か」だが、それをフロイトは自我に属しながら無意識の領域に抑圧された「不気味なもの」と呼ぶ。それは意識化されず超自我の働きによって存在が暗示されるのみである。「不気味なもの」は自己(主観)によってもそれと超越論的に重なる他者(客観)によっても保証されない中間的存在で、夢や無意識的身体行動に表れる。この「不気味なもの」の身体化に注目したい。

人間におけるこのような抑圧され心身に潜在化した「何か」は、逆に抑圧の働かぬ動物にはそのまま現象化されると予想できよう。その文脈でこそユクスキュルが生き物たちの「主観」に想定した魔術的環世界は一層興味深い。ここでは、生き物たちが人間と異なり間主観的な客観の呪縛的反省(抑圧)から無縁で「何か」が主観的現実となるのである。

3. 現代ドイツ文化・社会とユネスコの無形文化遺産

金城ハウプトマン 朱美

2017年12月現在、ドイツ国内にはドイツ・ユネスコ国内委員会により認定された無形文化遺産が68件存在する。これらの伝統行事や伝統工芸は、その担い手が「ドイツ民俗学」などの専門家の意見を参考にして自己申請したものである。日本ではドイツの世界遺産はよく知られているが、無形文化遺産はその存在自体があまり紹介されていない。

かつてナチズムに利用された伝統文化が、現代ドイツで無形の伝統文化という形で評価されるようになり、地域の担い手のみならず、国家や国際機関にも保護され、生き延びようとしている。その姿を明らかにすることが、本発表の狙いである。

ドイツの伝統文化がおかれている現状を把握することは、現在ドイツの文化や社会をより正確に理解することにつながる。ドイツ国内無形文化遺産の全体像を整理し、それらの特徴を明らかにし、現代ドイツの文化や社会の文脈のなかで捉えなおし、民俗学、社会学、ジェンダー学などの視点から学際的に考察することによって、未来のドイツ文化に与える影響について考えていきたい。ドイツ・ユネスコ国内委員会が選定した無形文化遺産の全体像は、日本人が持つドイツ文化のイメージを変えることになろう。本研究はドイツの文化や社会を正しく理解するのに必要な情報を提供する有意義な発表であると確信している。

4. 皮膚が意味するもの — 『ベルリン・アレクサンダー広場』とグロス、ディックスの諸作品を手がかりに

勝山 紘子

本発表の目的は、アルフレート・デーブリーンの『ベルリン・アレクサンダー広場』(1929年)と同時代の画家ジョージ・グロスおよびオットー・ディッ

クスの諸作品における身体描写を、皮膚の機能と自我の関係から考察、検証することである。皮膚は生体と外部環境を区切るものである。有機体としてのまともは皮膚によって外界から境界づけられ、この境界面において内と外の明白な分離が出現する。オリヴァー・ケーニヒによれば、皮膚は「疎外」の根源的な象徴である一方で、同時に、この「隔たっていること」は、世界との感覚的な接触の可能性を示している。境界面としての皮膚は、分離と接触の媒体なのだ。この距離を相対化したり止揚したりすることが、人間の相互の出会いを可能にし、ここに自我の前提が発生して、外的世界に対して文化的・社会的に「自己規定的な存在」として他者との区別が可能になる。しかし、境界面としての皮膚の機能は、自我の不可侵性を不確かにし続けるものでもある。皮膚は傷つきやすく、世界との接触はしばしば意図されず行われたり、苦痛を与えられたりするからだ。皮膚の傷つきやすさは、人間の存在的必然性の証しであると同時に、外界との根源的な分離の状態が常に脅威に晒されていることを意味している。『アレクサンダー広場』では、しばしば暴力、殺人、屠殺といった身体の破壊のプロセスが詳細に描かれる。発表では、グロスやディックスの作品の描写にも共通する、皮膚が破られ、血管が破損し、身体がその境界性を破壊される、という身体描写に着目し、そこに窺える皮膚と自我の関係について考察する。

ブース発表 I (14:00~15:30)
F 会場 (33 号館 331 教室)
(ブース発表は途中での出入り自由です)

Wortschatzlernen in Netzen - Interaktive Einführung in den daten-geleiteten Grundwortschatz Deutsch für japanische Deutschlerner

岡村 三郎・原口 厚・Joachim Scharloth

Im Rahmen des Kabinenworkshops möchten wir die Ergebnisse des von der JSPS geförderten Projekts "Wortschatzerwerb und Sprachgebrauch: Empirische Grundlagen für kognitive Erwerbsmodelle des Grundwortschatzes Deutsch" zur Diskussion stellen und einem Praxistest unterziehen. Im Verlauf des Projekts wurde ein Online-Wortschatzportal für japanische Deutschlernerinnen und Deutschlerner entwickelt (www.basic-german.com). Mit dem Wortschatzportal steht ein Grundwortschatz des Deutschen zur Verfügung, der lexikalische Relationen, die aus dem Sprachgebrauch datengeleitet berechnet wurden, auf jenen Ebenen modelliert, auf denen gemäß kognitiven Theorien relevantes Wortschatzwissen angesiedelt ist (Wortfamilien, Themen, Konstruktion, Klangähnlichkeiten, emotive Prägungen).

1. Einführung in die Erstellungskriterien und die allgemeine Funktionalität des Wortschatzes und seiner Visualisierungen (Saburo Okamura, 15 Minuten)
2. Impulsreferate und Test (Joachim Scharloth)
 - 2.1 Lernen in Netzen - der Grundwortschatz als Hypertext (max. 5 Minuten, 10 Minuten Test und Diskussion)
 - 2.2 Themennetze (5 Minuten, 10 Minuten Test und Diskkussion)
 - 2.3 Wortfamiliennetz, Klangnetz und emotive Prägung (5 Minuten, 10 Minuten Test und Diskussion)
3. Über den Nutzen von Grundwortschätzen für die Verstehenskompetenz (Atsushi Haraguchi, 15 Minuten + 15 Minuten Diskussion)

ポスター発表 (13:00~14:30)
G会場 (33号館 332教室)
(ポスターは期間中を通じて掲出されています)

Schwierigkeiten beim Einsatz sozialer Medien im japanischen Deutschunterricht für Anfänger

Axel Harting

Der Beitrag widmet sich den Ergebnissen eines im Sommersemester 2017 durchgeführten Projektes zum Einsatz von Facebook im japanischen Deutschunterricht. Die Fallstudie stützt sich auf Erkenntnisse aus dem Bereich des integrierten Lernens, die dem Einsatz sozialer Medien eine Steigerung der Lernmotivation (Blattner & Lomicka, 2012), der Autonomie beim Fremdsprachenlernen (Promnitz-Hayashi, 2013) sowie ein Potenzial für kollaboratives (Kok, 2008) und stressfreies (Dizon, 2015) Lernen zusprechen. Um herauszufinden, inwieweit sich diese positiven Effekte auch im japanischen Deutschunterricht beobachten lassen, wurde für zwei Lernergruppen (GER A0 und A1) jeweils eine Facebook-Gruppenseite eingerichtet, auf der die Lernenden eigene Beiträge schreiben und auf die Beiträge der anderen Lernenden reagieren sollten. Zur Evaluation des Projektes dienten die von den Lernenden verfassten Beiträge auf der jeweiligen Timeline der Gruppenseite sowie eine nach Beendigung des Projektes durchgeführte Befragung. Darin sollten die Lernenden ein Feedback zur konkreten Durchführung des Projektes geben sowie ihre Wünsche und Bedenken bezüglich der Nutzung sozialer Medien im Fremdsprachenunterricht äußern. Die kritische Auseinandersetzung mit den Ergebnissen dieser Fallstudie soll Anregungen geben, worauf bei der Verwendung sozialer Medien im Fremdsprachenunterricht geachtet werden sollte.

第2日 5月27日(日)

シンポジウム I (10:00~13:00)

A会場 (36号館 382教室)

戦後ドイツにおけるナチズム的言説の克服と復活

Überwindung und Wiederaufkommen des nationalsozialistischen Diskurses in Deutschland nach dem Kriegsende

司会：高田 博行・大宮 勘一郎

2017年9月のドイツ連邦議会総選挙において、「ドイツのための選択肢」(AfD)が第3党として国政進出を決めた。この政治状況にともない、ドイツにおける政治的言説が大きく変質しつつある。政治的言説の変質の動力源のひとつとなっていると思われるのが、ナチ時代の語彙と表現の復活である。本シンポジウムは、政治的言説のこの現況を解明すべく、戦後ドイツにおけるナチズムに関わる言説についてその言語の面と思想史の面に焦点を当て、考察しようとするものである。

まず、言語学史の観点から見ると(→田中報告)、ドイツにおいては第2次世界大戦の敗戦までの長い間、母語の権利を訴え、「言語を民族の主たる根拠」とするロマン主義的言語観が力を持っていた。「同じ言語を話すグループは一つの Volk をなし、それゆえ一つの国家を形成できる」というのである。敗戦にともない、言語にあまりにも重い価値を置くドイツ・ロマン主義的言語観を「武装解除」すること、母語の固有性と純粋性の探究と発見に強い関心を向けるこの言語観を克服することがドイツ人に求められた。

戦後ドイツの言語空間のなかで〈ナチズム克服の言説〉はどのような〈言説の抗争〉を経てきたのであろうか(→初見報告)。〈ドイツ人の罪を問う〉という〈全国規模〉の形での問題設定への反撥として、1950年代には〈罪〉の否認、沈黙を引き起こした。その後、〈過去の克服〉の言説が成立するものの、今度はそれへの反撥が〈タブー破り〉としてしばしば噴出する。また他方では、〈過去を反省している私たち〉という国民主体を形成しようという方向性が、移民などの間に他者を生んでいる。空虚な抽象論に収斂しないような〈連帯〉がいかに構想されうるのかは、いまだ途上の課題になる。

壁の崩壊とドイツ再統一とともに、反ナチス言説にとって新たな試練が始まった(→大宮報告)。ナチスを自ら打倒したという建国神話に依拠する旧東ドイツでは、ナチスをおのれ自身の過去として反省する意識が希薄だったところに、統一後には、旧西ドイツの自己譴責の言説が国民的ドクトリンとして入り込んだ。一方で、共産圏の崩壊とともに、ナチズムとスターリニズムを包括的に批判する「全体主義理論」が前景化した。この理論は、ナチスの人類的犯罪を相対化する歴史修正主義と結びつき、反ナチス言説は拡張と硬直化という相反する二方向に分裂し、自己反省的な国民統合の力を弱めている。

2013年2月に AfD が、2014年10月に PEGIDA が創立されてからは、ポリテ

ィカル・ポライトネスを破って話す政治家たちが目立ってきた（→高田報告）。彼らは今まで公的に口にできなかった表現で語り、それがまたソーシャルメディアを通じて大量に拡散する。ナチスの犯罪を否定し反難民的な態度を肯定するスローガンである *Lügenpresse* 「嘘つきメディア」(2014)、*Gutmensch* 「(難民に対して寛容な) 善人 (もどき)」(2015)、*Volksverräter* 「国民の裏切り者」(2016) が立て続けに、„Unwort des Jahres“ (その年の粗悪語) に選ばれている。このうちふたつはナチ語彙を再使用したものである。AfD が第3党となった今、これからドイツの政治的言説はどのように変質していくのであろうか。

1. ドイツ語の「武装解除」はできるか？

田中 克彦

戦争や革命などの社会的激変は、地域の国家的所属をかえることにより、その地域の言語と住民の生活に多大な影響をおよぼす。第1次大戦とロシア革命の結果をうけて、たとえば A.メイエはヨーロッパの全域にわたって、この問題の総覧をこころみた。

第2次世界大戦の結果はさらにすすんで、戦争の原因の一つとして、言語と、そのイデオロギーをとりあげさせた。たとえば A.ソンメルフェルトは、ドイツ語の戦争責任の源流を、19世紀はじめのドイツ・ロマンティックの時代にまでさかのぼらせた。それは、たとえばフランスとの比較において、言語にあまりにも大きな役割を担わせることによって、固有の言語を話す民族的集団 „Volk“ は、一つの国家を形成すべきであり、「言語は他のすべてに優先する社会的事実である」という思想に由来すると述べる。この思想にそそのかされた状況は、たしかに第二次大戦終結後の今日も続いている。

ドイツに対してフランスでは言語にそれほど重きを置くことをせず、他のさまざまな社会的要因に重きを置く。したがって、このようなドイツを精神的にも武装解除 (*désarmer aussi spirituellement*) せねばならないと説いたのである。この「精神的な武装解除」はそれほど簡単なことなのだろうか。終戦直後の特異な精神的高揚期における、ドイツ語制裁論が、いまも残りつづけるとするならば、それはどのようにして実現しうるのであろうか。

2. ナチズム克服の言説とその変容

初見 基

第2次大戦後ドイツ (分断時代は西側) における〈ナチの過去〉に対する公的議論の在り方をごく大雑把に、当初の〈集団の罪〉をめぐる諸発言から、アデナウアー時代における〈罪の否認・沈黙〉期を経て、1950年代末以降徐々に根づいてゆく〈過去の克服〉、そして1980年代半ば以来、顕著には2000年代に入っでの〈想起文化〉の隆盛、と図式化できる。むろんその過程は一筋縄でなく激しい反撥をはじめとするさまざまな〈抗争〉が繰り広げられ、そしてそれは現在もつづいている。

この変化の背景には、内外の政治・経済状況、諸政策や司法・教育の場の動向、さらに世代交代も与っている。ただ、これを思想史・言説史の流れのなかで観察したとき、また別の側面も現れてくる。本発表では、初期段階でひとつの焦点をなした〈集団の罪〉をめぐる、その限界と可能性を指摘する。

〈集団の罪〉概念は近代法の観点からすれば成立しえず、これを積極的に言い立てる論者はほとんどいない。ただ論理以前の相でこれが訴求力を持っていたのもたしかで、その後の〈ナチの過去〉をめぐる言説に隠然と影響を与えた。そこに前提されている〈集団的見地〉はナチと同類であるとの批判がつとになされている反面、〈集団的見地〉そのものは〈過去の克服〉や〈想起文化〉でも払拭されていないにとどまらず、また広い〈連帯〉の可能性を開く方向にも通じているだろう。

3. ドイツ再統一後における反ナチズム言説と全体主義理論

大宮 勘一郎

第2次大戦敗戦後の旧西ドイツにおいては、西側占領国の強い意向に加え、ユダヤ人大量虐殺などナチス政府下で多くのドイツ国民が積極的・消極的に加担した巨大な犯罪行為が明るみになり、過去への不断の反省と反ナチスの言説が国民の政治的良心の根幹をなすものとなった。他方、旧東ドイツにおいて、ナチスは自らの手で一掃した「敵」とみなされ、反省の対象となったとは言いがたい。過去をめぐる言説上のこの齟齬は、東西ドイツ再統一以降、ナチズムとスターリニズムを同じ一つの現象の亜種とする「全体主義理論」の前景化とともにより複雑化する。さらに、グローバリズム、EU諸国への援助や難民といった、一国内の文脈を超えた政治的問題を負う背景としつつ、とりわけ2010年代にはデジタル・ネットワークを基盤とした新ナショナリズムが力を増し、政治的言説上の抗争が新たな布置で激化している。そうした中で生じたのが、2015年12月にHannah-Arendt-Institut für Totalitarismusforschungの機関誌 „Totalitarismus und Demokratie“ を舞台とした偽論文事件である。ドイツ・シェパードというドイツ国民にとって象徴的な犬種がナチスからソヴィエト・ロシアを経てDDRに至る「暴力の連鎖」に「血統的連続性」によって加担してきた、とするChristiane Schulte名の論文 „Der deutsch-deutsche Schäferhund“ のテーゼは、さしたる検証もされぬまま、学会発表から査読を経て雑誌掲載という、学術的承認を受けた。刊行後匿名集団が、「執筆者」名や参考資料を含め全てフィクションであり、「学問的順応主義 akademischer Konformismus」に対する「風刺的介入 satirische Intervention」であったと打ち明け、スキャンダルとなった。その後集団側、機関誌側双方は、相互の学問的立場に対して批判を交わし合ったが、しかし、事件に固有の問題はそれぞれの主張の中身ではなく、批判的「言説」が硬直化と形骸化を余儀なくされるなかで学術的議論が陥ってしまう荒廃である。本発表は、ナチス犯罪の固有性に基づく「過去の反省」言説が、様々な対抗言説との交錯のなかで新たな試練を迎えていることを描き出し、埋没の危機から救出するために今後可能な取り組みのあり方を考える契機としたい。

4. 今日の政治的言説におけるナチ語彙の「復活」

高田 博行

このところドイツでは、人種や文化の多様性を大っぴらに否定する一部の政治家がナチ時代の語彙や表現（以下、「ナチ語彙」）を用いては、物議を醸している。「ドイツのための選択肢」（AfD）の党首を務めた Frauke Petry は *völkisch* 「民族主義的」という語を、André Poggenburg は *Volksgemeinschaft* 「民族共同体」という語を、ポジティブな意味で用いたいと宣言した。そのような政治家のひとり、AfD の Björn Höcke である。本発表では、Höcke の演説文（2013年8月30日～2017年12月15日、計102回の演説、約25万語）と Höcke 自身の Facebook への投稿（2016年9月1日～2017年12月31日、約5万語）をデータとして、ナチ語彙がどのような「復活」の仕方をしているのかをしてみる。

Höcke がナチ語彙をポジティブな意味で「旗標語」（Fahnenwort）としてナチ時代から引き継いでいる例は、たしかに確認できる（*Garant* 「保証人」、*Festung Europa* 「ヨーロッパ要塞」、*Neuordnung* 「新秩序」など）。しかし他方で Höcke には、ナチ語彙を意識的に回避する姿勢が確認できるばかりか、ナチ語彙がネガティブな意味の「烙印語」（Stigmawort）として用いられる事例も確認できる（*Führer* 「総統（指導者）」、*Hitler*、*Gleichschaltung* 「同質化」、*Nazi* など）。このように、実際の演説や投稿においてナチ語彙を避けたり、ナチ語彙をネガティブな意味でも使用する Höcke の言説が、演説を聞く聴衆たち、Facebook にコメントを書き込む人たち、また報道する記者たちの耳に、ナチ的に聞こえるのはどうしたことなのであろうか。これを説明するのに、ナチ語彙の「再コンテクスト化」という概念では不十分であろう。この点に関して、ひとつの答えを示したい。

シンポジウムⅡ (10:00~13:00)
B会場 (36号館 581教室)

さまざまな一年 — 近現代ドイツ文学における暦の詩学

Jahresarten. Zur Poetik des Kalenders in der modernen deutschen Literatur.

司会：金 志成

本シンポジウムは、ドロステ＝ヒュルスホフ『教会の一年』(1851)、ゲオルゲ『魂の一年』(1899)、ムージル『特性のない男』(1930-32)、バツハマン『三十歳』(1961)、ヨーンゾン『記念の日々』(1970-83)という、ドイツ文学史において古典としての評価が確立している五作品が、一年間という共通の時間的枠組みを採用していることに着目し、比較研究を行うものである。いずれのテキストも一年間というコンセプトを明確に意識して書かれている点では共通するものの、書かれた時代や扱われる時代、ジャンル、作者のジェンダーなどは実に多種多様である。各発表がそれぞれの対象作品の綿密な分析から固有の「暦の詩学」を引き出してくることで、シンポジウム全体をつうじてドイツ文学に現れる〈一年〉の諸相が明らかになるだろう。

近現代文学を論じるのに暦を持ち出すのは大いなるアナクロニズムに見えるかもしれない。しかし、文学作品における暦の機能に着目した A. Honold (2013) が説得力をもって論じたように、「全体への予感」がすでに失われた近代だからこそ、「全体」を表象するためには「暦」という客観的な指標が逆説的に必要とされると考えられる。1904年6月16日という特定の〈一日〉に森羅万象を詰め込んだジョイスの『ユリシーズ』を範例として挙げる Honold のテーゼを踏まえつつ、本シンポジウムはベンヤミンの近代批判や暦学をはじめとする思想的・文化学的な言説を積極的に参照することで、〈一年〉という主題との文学的対決に現れる近代性のさまざまな契機を探ることを目的とする。

その際、特に着目するのは、〈一年〉が持つ二重性がそれぞれの作品にどのように反映しているか、という点である。というのも、〈一年〉は、ひとつの単位 (Einheit) という意味では統一性 (Einheitlichkeit) ないし完結性を志向する円環的な時間イメージを表すものであるが、他方で特定の〈一年〉である以上は一回的なものに他ならないからである。そしてこの特定の〈一年〉は直線的な歴史のなかに位置づけられるとともに、その連続的な時間の流れを切断してもいるということが出来る。しかも、同じ〈一年〉であっても、いつを起点にし、どの下位単位 (日、月、季節など) に基づいて分節化するかによっても表されるイメージが大きく異なり、これらはジャンルや形式といった詩学の問題と直接的にかかわってくる。たとえば『教会の一年』および『魂の一年』は、それぞれキリスト教の祝祭日や季節のサイクルを動機とする連作詩 (Zyklus) として円環的な時間イメージを表すが、『特性のない男』および『記念の日々』といった (超) 長篇小説は、それぞれ「1914年」や「1968年」という歴史的な〈一年〉を扱うことで直線的な時間イメージを表しているし、短篇小説である『三十歳』は個人の人生における切れ目としての〈一年〉を主題化している。もちろん、対象となる

のがどれも優れた文学作品である以上、こうした図式的な分類を逃れる契機が孕まれている。各発表においてはそのような契機にも怠りなく注意が払われることになる。

1. 瞬間と円環 — アネッテ・フォン・ドロステ＝ヒュルスホフ『教会の一年』と世俗化の時代

西尾 宇広

しばしば 19 世紀は「迅速化 Beschleunigung」の時代であったといわれる。交通・通信技術の発展によって物理的な空間は縮小の一途を辿り、人々の時間経験のテンポ自体が飛躍的に加速した。さらに、フランス革命による歴史的連続性の断絶の経験が未来の不確定性に対する不安を増大させると、人々の歴史感覚はしだいに刹那的になっていく。この「迅速化」が近代のいわゆる「世俗化 Säkularisierung」の過程とも連動していた点に着目するならば (Koselleck 2003)、カトリックの祝祭日とすべての日曜日に寄せる形で書き継がれたドロステの連作詩集『教会の一年』(1851) が示す宗教的・時間的枠組みは、その流れに真っ向から対立しているように見える。しかし、教会暦に依拠しつつも待降節ではなく元日に寄せた詩から始まるその形式には、すでにキリスト教と市民社会の時間感覚の齟齬が表れてもいる。本発表では、同じく〈一年〉という主題でこの作品を取り上げた先行研究 (Honold 2013) ではなされていない歴史的な文脈化の作業を、とりわけ当時の出版メディアに見られる二つの時間意識——日常的な消費物としての鮮度の高い言葉への志向 (グツコー) と周期的に反復する時間のなかで意味を保ち続ける言葉の耐久性への信頼 (ヘーベル) ——を補助線としておこなうことで、加速の度合いを強める近代化への抵抗と同時に、貴族的・カトリック的共同体の伝統、さらには市民社会の規範的制約からの脱却を企図するドロステの複層的な試みに光をあてる。

2. シュテファン・ゲオルゲ『魂の一年』

小野寺 賢一

ベンヤミンによれば、ボードレーが『悪の華』で描き出した通りすがりの女性に対する恋は、それが対象の刹那的な現前性に根ざしているという点において、大都市での恋愛の重要な一側面を表現している。これに対して、やはり通りすがりの女性への恋を主題とするゲオルゲの詩においては、恋愛感情が対象との合一への憧れと結びついているのだという。この簡潔的で射た指摘はボードレーの詩作の近代性を際立たせると同時に、ゲオルゲの詩作の非近代的な性格を浮き彫りにしている。しかしその一方で、ゲオルゲの詩作の根幹にある、近代性と反近代性の弁証法的な緊張関係をとらえるまでには至っていない。

ゲオルゲがイーダ・コーブレンツとの不幸な恋愛体験をもとに書いた『魂の一年』(初版 1897 年/第二版 1899 年) には、まさにこの緊張関係をみてとること

ができる。この連作詩集は循環構造をもち、なかでも「狭義の『魂の一年』」(Morwitz 1960)にあたる第一部では、めぐる季節を背景に、「私」と、彼が愛をかわした人物たちとの出会い、そして別れが歌われる。ゲオルゲは〈一年〉という枠組みがもつ一回的かつ反復的な性質を利用することで、自身の恋愛体験を、それがもつ刹那的かつ個別的な性格はそのままに、より大きな持続的連関のうちに組み込んだのだと考えられる。本発表では以上のことを論じるなかで、ゲオルゲの〈一年〉がもつ詩学的な意義を明らかにする。

3. 解体していく〈一年〉が形づくる理念

— ムージル『特性のない男』における時間感覚と非完結性の詩学

宮下 みなみ

『特性のない男』(1930/32年)の際立った特徴の一つとして、引き伸ばし、反復、一回性など、通常は両立しがたい多様な時間感覚が並存して描き出される点あげられる。ムージルはこれらの複数の時間感覚がそれぞれ恣に振舞って無秩序な混乱を招かないようにするための客観的基準として、1913年8月から始まる歴史的〈一年〉という時間的枠組みを必要とした(Honold 2013)。本発表はこの観点を出発点に、本作品が〈一年〉という時間的枠組みを置いたにもかかわらず、その環を閉じられなかったことの意味を考え、ムージルの詩学の本質を問い直すものである。確かに作品が未完に終わったことについては時代状況や伝記から説明もつくだろうが、しかしその最たる要因は、何よりも作品に内在する理念そのものにある。つまり、様々な言語選択の可能性の中から唯ひとつを選びだし順に並べていく執筆作業は、「可能性感覚」の理念に反するからである。しかし逆に言えば〈一年〉が完結しないからこそ、ムージル独自の理念は貫かれたことになる。このような暦にまつわる非完結性の詩学は、一年物という物語構造を借りつつそれを換骨奪胎しており、ただ既成の物語構造の解体のみに終始しない。この観点から、本作品に脱近代的な意識の萌芽を読みとることもできるだろう。

4. 区切りの一年 — バッハマンの短編「三十歳」

山本 浩司

暦物語の文脈で考えるとき、バッハマンの短編小説「三十歳」(1961)は、暦上の「年」が同時に特定の人生にとっての「歳」でもあるという二重性を考慮している点で特別な位置を占める。しかも、20世紀文学の偏愛した幼年・青春でも中年(「ミッドライフクライシス」)でもなく、最近脚光をあびる老年ですらなく、あまり注目されない青年期から男盛りへの境目に焦点を当てたばかりか、女性作家が異性装して自伝的ならびに同時代史的関連をあたうかぎり抹消した点でも、凡百の人生物語とは趣を大きく異にしている。この短い小説については、過熟したバッハマン研究で論じ尽くされた感なきにもあらずだが、本発表は、今なお規範的な研究(Höller 1987; Weigel 1999)と対話を進めつつ、バッハマンが

「年」＝「歳」の二重性に掛け合わせるようにして、さらに「都市」、すなわちウィーンとローマという二重の地誌を用意している点に注目した上で、この掛け合いの意味をバフチンのクロノトポス論など小説の時空間表象に関する先行研究を応用して解説していこうとするものである。作中で定住と放浪、「隠語」と「別の言葉」などの対立軸が収斂していく両都市は、直線的に流れるクロノロジーとそれに垂直に切り込む非連続的な時間（ヘテロクロニー）という二つの時間概念と結びつく特徴的なクロノトポスをなしており、一回性と反復性という暦の相反する性格の紛うかたない刻印を受けていることが明らかにされるだろう。

5. 「さあ、この年を記述しなさい」

— ウーヴェ・ヨーンゾン『記念の日々』における暦と契約

金 志成

ヨーンゾン最後の小説は、「記念の日々＝一年の日々 (Jahrestage)」という二重性を帯びた表題がすでに示唆するように、テキストの構成単位となる 366 の日付がすべて出そろふことによって初めて体を成す作品である。長期のライターズ・ブロックを経ながらも作家が作品の「完結」に執着したのは、第一に以上のようなコンセプトを完遂するためではあるが、他方でそれは、出版社、読者、そして主人公であるゲジーネ・クレスパールとの「契約 (Vertrag)」のためでもあった。「契約」の履行というきわめて近代めかつ目的論的な動機は、『記念の日々』のテキスト内部のさまざまな次元に痕跡を残している。これと密接にかかわる本作における暦の詩論的機能については先行研究においても繰り返し注目されてきたが、その帰結としては、とりわけ副題の「ゲジーネ・クレスパールの生活から」に現れる前置詞「から (aus)」を根拠に、反＝目的論的な側面が強調される傾向にある (Heinz-Jürgen 2005)。本発表は、作品表題の二重性、主題としての「68年」、「祝祭日」と「想起」の関係 (ベンヤミン)、日刊紙とのアナロジーといった、先行研究のいくつかのトポスをなぞりつつも、テキストそのものの成立にかかわる複数の位相での「契約」の動機を、本作の執筆中断時期に書かれた詩論的エッセイを参照しつつ脱構築的に分析することで、本作の暦の詩学に隠された目的論的な志向を見出すことを試みる。

シンポジウム III (10:00~13:00)
C会場 (36号館 681教室)

詩と哲学の饗宴 — 1800年前後における総合的思考の生成

Symposion der Poesie und Philosophie. Zur Entwicklung des synthetischen Denkens um 1800

司会：胡屋 武志

17世紀に生じた科学革命以降、ヨーロッパでは合理主義的な認識と思考が拡がることで、宗教中心であった世界観の脱呪術化が進行した。18世紀前半のドイツでは、フランス由来の啓蒙主義文化が支配的となり、詩学の領野でも規範主義的な傾向が強くなった。同世紀後半には、この傾向に対してスイス派の理論家や疾風怒濤の詩人たちによる批判と反動が生じるが、同時にカントやレッシングのような、単なる理性中心主義とは一線を画する自律的・批判的な啓蒙主義的思考が現れたことも興味深い。ゲーテらの詩人は様々な形式と素材を用いて作品を産み出し、芸術や学問の各領域には新しい潮流や方法、概念が登場した。こうした状況を俯瞰するならば、世紀転換期にイェーナに集合した20代の若者たちが、その知的運動とともに目指した「総合」の試みは必然的であるように見える。ドイツ文学研究においてこの時期の総合的傾向はロマン主義文学の包括性などとともに多々指摘されてきたが、彼らが試みた総合の形式や内容そのものが問われることは少なかった。ゆえに本シンポジウムでは、初期ロマン派のフリードリヒ・シュレーゲル、ノヴァーリスに加えて、彼らと大きな内的親和性を持つように見えるヘルダーリンに焦点を当てて、三人の詩的・哲学的実践の中にある「総合／共同」の振る舞いとその方法を考察することを目的としている。

総合とは、拡散している複数のものを一つに束ね、融合することを意味している。18世紀後半以降のドイツでは、学問や芸術をめぐる思考や認識は個々のセクトや領域、ジャンルへと分断され、人々は共感能力を失い、他者との連関が失われていった。こうした「断片化」の時代のただ中に生きる三人の活動は、生来の実験的な精神とともになされる「詩と哲学の総合」という試みの点で一致している。観念論哲学から大きな影響を受けた彼らにとって、詩は哲学を実践するための不可欠の器官であり、哲学は詩を創出するための必然的な方法であった。シュレーゲルは断章の一つで「哲学とは、全知を共同で探求することである」と述べるが、彼にとってこの哲学的共同のための最も重要なパートナーであったのは詩人ノヴァーリスである。二人は共同してテクストを執筆し、それを匿名で公表することで詩と哲学の総合を実践した。そしてこの実践には、啓蒙主義時代に薄められた神性への強い宗教的希求が伴なわれていた。

二人との現実上の接点がわずかであったヘルダーリンは、彼らとは異なる形で詩と哲学を総合しようとした同世代の詩人哲学者であった。ヘーゲルやシェリングとともに「新しい神話」を構想したのち、詩作や翻訳によってギリシアとドイツを総合するべく、独自の創作活動を行った。このような形で1800年前後の時期に生じた「総合」という動きをめぐって四人の発表者は、それぞれの関心から個々のテーマを設定し、考察を行うことになる。

1. 「宇宙についてのロマン」から「宇宙のポエジー」へ — 1800 年前後における詩学のプロジェクト

武田 利勝

1780 年頃のゲーテの念頭にあった「宇宙についてのロマン」というプロジェクトは、彼自身の生涯にとっては小さなエピソードかもしれない。掌編「花崗岩について」(1784) という小さな実を結ぶにとどまったこのプロジェクトはしかし、それがビュフォンの『自然の諸時期』(1778) という一個の叙事的宇宙形成史に対峙するはずのものであったことを思い起せば、もっぱら自然科学的な関心の枠組みを超えて、「詩と哲学」の総合という 1800 年前後の根本主題を準備する重要なドキュメントであったことがわかる。ビュフォンとゲーテの決定的な違いは、後者において、宇宙のなかに身を置く「私」が登場することである。それはもはや地球史の終章で英雄的に振る舞う叙事的な、あるいは抽象的な人間ではなく、主観性を備えた自我である。宇宙のただなかに自覚される「私」ゆえにゲーテの構想は近代的な(ブランケンブルクが定義する意味での)「ロマン」と称しうるはずのものだった反面、しかしこの自意識を備えた「私」ゆえにこそ、宇宙との本来的な一体化はもはや不可能となり、ゲーテの記述は結局のところモノローグに終わらざるをえない。

だが「宇宙についてのロマン」が抱えるこうしたパラドックスはゲーテ自身のもとを離れ、1790 年代末、批判哲学との格闘を通して自らの思考を形成したフリードリヒ・シュレーゲルによって、「宇宙のポエジー」のもとに一気に掬い上げられることになるだろう。

2. „Wollust der Synthesis“ — ノヴァーリスにおける「総合」概念の変遷

高橋 優

ノヴァーリス(フリードリヒ・フォン・ハルデンベルク)は、1795/96年の『フィヒテ研究』から1801年の夭折に至るまで、「総合」をめぐる哲学的思索を続けていた。『フィヒテ研究』においては、スピノザの自然哲学とフィヒテの自我哲学、「反省」と「感情」、「時間」と「空間」といった二項対立の総合の可能性を探っている。その後、カントやヘルダーの著作への取り組みを通じ、フィヒテの思弁哲学から距離を置くようになる。抽象的概念としての「感情(Gefühl)」は「触覚」に読み替えられ、対象との直接的、相互的な関わりを表す概念となる。さらに『一般草稿』(1799 ごろ)の „Gefühl der Weltseele in der Wollust“ や „Wollust der Synthesis“ という用語法にも見られる通り、主観と客観の総合としての触覚には官能的な意味が付与される。

ノヴァーリスが文芸活動を通じて究極的に目指していたものは、客体としての „Sinn der Welt“ と主体としての „Weltsinn“ の「総合」を官能的(sinnlich)に表象することであったと言える。『フィヒテ研究』において思弁的にのみ示唆されたスピノザとフィヒテの総合は、詩作においては「官能」を通して表象されているのである。本発表ではノヴァーリスにおける「総合」が思弁的概念から具体的、

肉感的な「エロス」へと変遷していること、「総合」をめぐる彼の思索が、晩年の文学作品『夜の賛歌』、『ハインリヒ・フォン・オプターディンゲン』（いずれも1800ごろ）における、宗教にまで高められたエロスの根底にあることを確認する。

3. „So wäre alle Religion ihrem Wesen nach poëtisch.“

— ヘルダーリンの宗教論における「想像力」の役割について

大田 浩司

ヘルダーリンと初期ロマン派の文学者たちは、有限性と無限性、必然性と自由といった二項対立を総合する可能性を「新しい神話」の中に見出した。彼らにとって新しい神話とは、伝統的制度から離れた徹頭徹尾個人的なものでありながら、断片化した社会を一つに融合する機能を持つ。またそのような神話は、詩と哲学、感性と理性を総合するものであり、それらの両極を媒介する「想像力」(Einbildungskraft)が重要な働きを果たすとされる。

ヘルダーリンは論考「宗教について」の中で、あらゆる宗教はその本質において詩的であるとし、人間と神とを仲介する美的・詩的表象の重要性を強調する。彼にとって神の出現は、有限な人間の知覚・認識の能力を凌駕する「自然の威力」の出現であり、人間に「現実の生の瞬間的停止」をもたらす表象不可能な出来事にほかならない。しかし人間が自らの生に感謝する(dankbar)ためには、神が詩的なイメージとして表象されつつ、反復的に想起(erinnern)されねばならないとされる。また共同体の各人はそれぞれ異なった仕方で神を詩的に表象するが、それらの互いに異なる神のイメージは調和的に対立しつつ、一つの共同的な神のイメージへ総合されるという。本発表は、ヘルダーリンの宗教論において、表象不可能なものとして表象、個人と共同体という二項対立を克服するために、想像力がどのような機能を果たしているかを解明することを目指す。

4. Werden の総合 — フリードリヒ・シュレーゲルの模倣的批評について

胡屋 武志

シュレーゲルが1790年代後半に一連の覚え書きの中に記録した構想「文献学の哲学」に示されているのは、彼の詩学思想の中心にある精神と文字から成る二元論的な世界観である。「ロマン的文学」、「新しい聖書」、「エンツィクロペディー」などの形象は、この世界観に基づく、宇宙的総合性を志向した理念的な文字形象である。これらが独特であるのは、その中に批評が内蔵されているだけでなく、この批評が模倣的・演技的な構造を持っている点にある。そして、批評の模倣的・演技的な機能を象徴しているのが、ケルン講義『哲学の展開』(1804-05)の中に登場する概念 Werden である。

同講義でシュレーゲルは、対象世界を「存在」Sein と「生成」Werden という二つの相とともに捉え、その本質を後者の下に見る。ここで注目すべきは、両語が主語と補語を結合する繫辞の機能を持つ動詞であることである。かたや sein

が主語と補語の関係を固定し、命題内容の無時間性・永続性を前提している一方で、**werden** は、かつて非同一であった主語と補語の関係が未来に同一となるという時間的な変化と関係の流動性を表す語である。過去の「でない」と未来の「である」の矛盾的な対立を時間的に止揚し、主語と補語を融合するのが **werden** の現在形であるように、シュレーゲルの詩学において、**werden** と同様の紐帶的な機能を担うのが、主体と対象を模倣的に総合する批評である。

シンポジウム IV (10:00~13:00)
D会場 (36号館 582教室)

Literaturtheorien in der Anwendung

Moderator: Arne Klawitter

Hartnäckig hält sich das Vorurteil, Theorie erschwere die Interpretation, statt eine geeignete Methodik zur Bedeutungsfindung literarischer Texte bereitzustellen. Allzu häufig wird im Literaturunterricht die Frage nach dem, was Literatur ist und was es heißt, sie zu interpretieren, einfach vermieden bzw. man setzt schlicht voraus, dass es darum gehe, den Text „richtig“ zu verstehen und ihn so zu kommentieren, dass man seine „Botschaft“, d. h. den „eigentlichen“, vom Autor intendierten Sinn erfasst. Doch gibt es ganz unterschiedliche Literaturbegriffe und eine Vielzahl von Optionen, einen Text zu interpretieren. Das Symposium hat sich deshalb zum Ziel gesetzt, die Notwendigkeit, die vielfältigen Anwendungsmöglichkeiten, aber auch die Grenzen einzelner Literaturtheorien aufzuzeigen, und zwar an ganz konkreten Beispielen. Dazu hat jeder Vortragende eine spezielle Theorie bzw. Methode ausgewählt, die er in seinen Forschungen selbst verwendet (hat), um sie dem Publikum vorzustellen und so anzuwenden, dass die Vorzüge und die Anschlussfähigkeit dieser Theorie zur Geltung kommen. Dabei werden sowohl Grundsatzfragen der Literaturwissenschaft behandelt, als auch das interpretatorische Instrumentarium zur praktischen Anwendung erläutert. Im Einzelnen sollen literaturwissenschaftliche Gegenstände oder Gegenstandsbereiche (z. B. Zeichen, Text, Werk, Narrativ usw.), die für den jeweiligen Theorieansatz relevant sind, definiert und erörtert werden. Aber auch die Frage nach der Wissenschaftlichkeit von Interpretationen wird in den Vorträgen diskutiert. Literaturtheorie wird dabei als seismographischer Indikator für die Krisen der Literaturwissenschaft betrachtet, zumal diese die grundsätzliche Frage der Wissenschaftlichkeit betreffen. Literatur, das haben nicht erst poststrukturalistische Ansätze gezeigt, konstituiert sich in einem sprachlichen Sinnkonstitutionsakt, der weder eingeholt, noch hintergangen werden kann. Durch die Literaturtheorie werden literarische Texte auf eine Weise problematisiert, sodass diese Unhintergebarkeit des Sinnkonstitutionsprozesses zur Geltung kommt. Auch diesem Sachverhalt werden die Vorträge Rechnung tragen. Das Symposium soll letztlich dazu dienen, vor allem bei Nachwuchswissenschaftlern die Hemmschwelle vor der Theorie überwinden zu helfen und die Anschlussfähigkeit der ausgewählten Theorieansätze deutlich zu machen.

1. Ästhetische Resonanz sino-japanischer Schriftzeichen bei Max Dauthendey

Arne Klawitter

In meinen vorangegangenen Untersuchungen (*Ästhetische Resonanz. Zeichen und Schriftästhetik aus Ostasien in der deutschsprachigen Literatur und Geistesgeschichte*) hatte ich mir zur Aufgabe gesetzt, eine Methode zu entwickeln, mit deren Hilfe es möglich ist, literarische Texte, aber auch Kunstwerke in ihrer affektiven Wirkung zu beschreiben. Dabei hatte ich einen Literaturbegriff zugrunde gelegt, wonach nicht der Sinn im Mittelpunkt der Betrachtung steht, was in der Konsequenz bedeutet, dass es in der Textanalyse nicht darum geht, den (noch ungesagten) Sinn herauszufinden oder die

Signifikationsprozesse zu beschreiben, sondern jenseits der Bedeutung die vielschichtige affektive Wirkung einer bestimmten ästhetischen Wahrnehmung (des Textes, des Kunstwerks bzw. der Zeichen allgemein) zu erfassen. Diesen Begriff hatte ich schließlich mit der „ästhetischen Resonanz“ gefunden, wobei ich im Einzelnen zwischen der klanglichen, schriftbildlichen und affektiven Resonanz unterschieden habe. In meinem Vortrag frage ich vor allem danach, welche Inspirationen die deutschsprachige Literatur (hier insbesondere der Autor Max Dauthendey) aus der Begegnung mit den für ihn unlesbaren Schriftzeichen und den damit verbundenen poetischen Formen erhalten hat. Behandelt wird zum einen Dauthendey's Reiseversepos *Die geflügelte Erde* (1910), wobei ich auf die Verwendung der Binnenreime und „Kissenwörter“ (nach dem japanischen Vorbild der *makura kotoba*) eingehen werde, um die hervorgebrachte klangliche Resonanz zu beschreiben; zum anderen werden die Erscheinungsweisen unleserlicher Schriftzeichen in der Erzählung „Die Segelboote von Yabase im Abend heimkehren sehen“ aus dem Erzählband *Die acht Gesichter am Biwasee* (1911) untersucht, um die affektive Resonanz der dargestellten Zeichen herauszustellen. Abschließend geht es um die Frage der ‚literarischen Resonanz‘ von sogenannten halbvergessenen Dichtern (insbesondere des 18. bis frühen 20. Jahrhunderts) und die Rolle, die diese oft als zweit- oder drittklassig deklarierten Autoren bei einer Revision der Literaturgeschichtsschreibung spielen könnten.

2. Bourdieus Feldtheorie und die gesellschaftlichen Sprachen der Liebe in Musils Roman *Der Mann ohne Eigenschaften*

Thomas Pekar

Im Anschluss an die Feldtheorie des französischen Soziologen Pierre Bourdieu (1930–2002), der diese vor allem 1992 bei seiner exemplarische Lektüre von Gustav Flauberts Roman *L'Éducation sentimentale* angewandt hat, und im Anschluss an die ‚sozioanalytische‘ Interpretation von Musils Roman durch Norbert Christian Wolf (vgl. sein 2011 erschienenes Buch *Kakanien als Gesellschaftskonstruktion*) soll in meinem Referat der Versuch unternommen werden, den Aufbau von Musils Roman unter dem Aspekt von gesellschaftlichen Sprachen der Liebe zu analysieren, die in verschiedenen sozialen Feldern artikuliert werden und einen für das jeweilige Feld typischen habituellen Stil entfalten. Die Gesamtheit der im Roman auftauchenden Felder bildet die gesellschaftliche Sprache der Liebe von Musils Roman-Chronotopos (1913/Wien) ab, die allerdings von Musil insgesamt als defizitär angesehen wird, weshalb sein Romanheld Ulrich sich dann im zweiten Buch des Romans, zusammen mit seiner Schwester Agathe, auf die Suche nach einer neuen (gewissermaßen a-sozialen) Sprache der Liebe begibt. – Mit der Anwendung von Bourdieus Feldtheorie in Verbindung mit Wolfs Sozioanalyse auf die spezifische Thematik der Liebessprachen in Musils Roman wird eine literatur- und kulturwissenschaftliche Methode vorgestellt, die sowohl der eigentümlichen (wenn man so will ‚ästhetischen‘) Struktur des literarischen Textes gerecht wird, wie auch diesen Text in seine konkreten Zeit-, Sozial- und Kulturbezüge stellt. Damit wird Musils Roman unter dem Aspekt gelesen, dass sich mit ihm ein konkreter Referenzialisierungsanspruch artikuliert, nämlich die Liebessprachen seiner Zeit und Gesellschaft aufzunehmen und literarisch zu diskursivieren; dies wäre gegen selbstreferentielle Deutungen des Romans zu betonen.

3. Mediengeschichte als Methode der Komparatistik vorgeführt am Beispiel einiger dadaistischer Texte

Yuji Nawata

In den 1980er Jahren haben die Kulturwissenschaften als eine dezidiert auf die Kulturgeschichte orientierte Wissenschaft im deutschsprachigen Raum begonnen, die Humanwissenschaften zu erneuern. Zu den Gegenständen dieser Wissenschaft gehört auch und gerade die Literatur, wobei die Literatur in Bezug auf ihre historischen Voraussetzungen wie z. B. den Medien des jeweiligen Zeitalters analysiert wird. Die Kulturwissenschaften, wozu auch die Mediengeschichte gehört, hat allerdings einen beträchtlichen Mangel: Sie beschränkt sich zu oft auf die europäische Kulturgeschichte. In meinen bisherigen Forschungen (Nawata: *Vergleichende Mediengeschichte*, München 2012, ders.: *Kulturwissenschaftliche Komparatistik*, Berlin 2016) habe ich immer wieder versucht, die Kulturwissenschaften auf die Komparatistik anzuwenden. Dies möchte ich in meinem Referat am Beispiel des Dadaismus vorführen. Es ist bekannt, dass Dada eine internationale Bewegung war und dass sich die Dadaisten gegenseitig über Staatsgrenzen hinweg beeinflussten. Die Internationalität des Dadaismus wurde allerdings stark von einer gemeinsamen medialen Situation globaler Dimension unterstützt. Grammophon, Photographie, Film, bewegliche Lettern wie Zeitungen und Zeitschriften koexistierten miteinander, während Materialitäten wie Töne, Bilder und Schrift miteinander kollidierten; dieser gemeinsame mediale Zustand synchronisierte die kulturellen Strömungen verschiedener Gebiete der Welt wie z. B. dadaistische Bewegungen verschiedener Weltgebiete. Aufgegriffen werden deutsche und japanische dadaistische Texte von Richard Huelsenbeck (*Die Primitiven*, 1916), Walter Mehring (*Enthüllungen*, 1920) und Hagiwara Kyôjirô (*Shikei senkoku [Todesurteil]*, 1925). Intention des Vortrags ist eine Erprobung der im Vortragstitel genannten Methode (Mediengeschichte als Methode der Komparatistik), mit der eine Alternative zur hermeneutischen Literaturwissenschaft aufgezeigt werden soll, die im Text immer eine Botschaft des Autors zu finden meint, ebenso zu einer Komparatistik, die nur die Rezeption und Einflüsse zwischen Schriftstellern erforschen will, sowie zu einer eurozentristischen Kulturwissenschaft.

4. Zur Analepse in Bashôs *Oku no Hosomichi* mit vergleichendem Blick auf eine Erzählung von Thomas Mann

Robert Wittkamp

Die Frage nach der Zeit steht ohne Zweifel im Mittelpunkt der Narratologie. In meinem Vortrag wird das Thema aus ihrer philosophischen und hermeneutischen Allgemeinheit (Paul Ricœur) enthoben und konkret auf die Analysemodelle von Eberhard Lämmert und Gérard Genette zurückgegriffen. Bekanntlich entwickelte die klassische Narratologie (Erzähltextanalyse) ihre Beschreibungsparameter anhand der europäischen modernen Literatur, und angesichts des Universalitätsanspruchs stünde ihre Anwendbarkeit auf vormoderne nicht-europäische Literatur zur Prüfung an. Die japanischen Wissenschaften zur vormodernen Landesliteratur (*kokubungaku*) greifen nur selten auf westliche Theorien und Methoden zurück, und umgekehrt ist in westlichen Untersuchungen oftmals ein vorschnelles, unreflektiertes Anwenden auf die vormoderne Literatur Japans zu registrieren. Es gilt daher, die Begriffe und Modelle genauer zu

reflektieren und in der Praxis zu erproben. Zu diesem Zweck wurde ein Werk gewählt, das zwar zu den bekanntesten Klassikern Japans gehört, jedoch nur selten Gegenstand der Erzähltextanalyse ist: Matsuo Bashōs *Oku no Hosomichi*. Konkret geht es um den Nachweis, dass die Erzähltextanalyse die Lösung zu einem ganz spezifischen Problem beisteuern kann. Es handelt sich um das, was die *kokubungaku* als *tekisuto-zukuri* beschreibt, das heißt das Herauslösen von Satzeinheiten aus Texten, die ohne Interpunktion verfasst wurden. Zu Erhärtung der Vermutung, dass die dortige Technik der aufbauenden Rückwendung zu den universalen, im Medium der Schrift vorliegenden Erzählverfahren gehört, wird abschließend ein Blick auf eine vergleichbare Erzähltechnik bei Thomas Mann geworfen.

シンポジウム V (10:00~13:00)
E 会場 (36 号館 682 教室)

情報構造と話し手の状況把握
Informationsstruktur und Sprechereinstellung

司会：森 芳樹

「情報構造」という概念は、言語研究において長きにわたり重要な地位を占め続けてきた。その萌芽はプラグ学派のマテジウスによる Thema-Rhema-Gliederung にまで遡ることができるが、このテーマ・レーマという区別は現代においてもしばしば用いられるほど確固たる地位を築いている。今日の理論言語学においても情報構造は重要なトピックとなっており、関連する研究は枚挙にいとまがない。しかし、それが如何に呼び慣わされているからといって、正しい分析であるとも、研究を進める観点であるとも保証されているわけではない。実際、形式意味論の分野では Rooth (1985, 1992) により焦点の代替意味論 (alternative semantics for focus) が提案されて以降、焦点現象に関する理解は多大な進歩を遂げたし、生成文法では Rizzi (1997) による地勢図的アプローチ (Cartography of Syntax) 以降、CP 領域を細分化し焦点句 (FocusP) や話題句 (TopicP) が細かく分析されてきた。

情報構造を語るうえで欠かせないのが、前提 (Präsupposition) や共有知 (Common Ground) などの、話し手や聞き手の知識状態に関する概念である。例えば焦点は典型的には存在前提を誘発することや、既知性は共有知との関連で定義可能であることが指摘されている (Krifka 2008)。話し手が何を「前提」や「共有知」とみなしているのか (換言すれば、話し手がどのような状況把握をしているのか) を分析することなしには、今日の情報構造研究は成り立たない。

また、情報構造と深く関わるものとして、語順や強勢アクセントといった言語現象も見逃せない。話題となっている要素が左方転移される現象は極めて多くの言語で観察されているし (Anagnostopoulou, van Riemsdijk & Zwarts 1997)、強勢アクセントが焦点の標識として機能する傾向は通言語的にも認められている (Kučerová & Neeleman 2012)。そして語順やアクセントといった現象を扱う上では、統語・音韻インターフェイスの本質的な理解も不可欠であろう。

そこで本シンポジウムでは、情報構造と話し手の状況把握の関連に目を向け、その一方あるいは双方に関わる言語現象を取り上げつつも、統語・音韻インターフェイスの問題にまで言及する。まず山崎の発表では、すぐれて情報構造表現だとされてきたドイツ語の分裂文の分析にあたり「意外性」という話し手の状況把握に関わる概念を導入することで、分裂文の多様性の説明を試みる。林&森の発表では、これまでほとんど議論の俎上に載せられることのなかった懸念標識を取り上げ、話し手の状況把握との関わりを指摘する。Klink の発表では、局所前提よりも全体前提が選好されるという指摘を実験的手法を用いて検討し、前提に関する話し手の状況把握の在り方を明らかにすることを目指す。伊藤の発表では、強勢アクセントを伴う心態詞 JA を情報構造に関する

統語理論で分析することで、心態詞 *JA* の持つ、話し手の状況把握に関わる機能の説明が試みられる。稲葉の発表では、語順と強勢アクセントを扱うことで、情報構造を検討するにあたり看過されがちであった統語・音韻インターフェイスの問題を真正面から取り上げることになる。

1. ドイツ語の分裂文における意外性

山崎 祐人

ドイツ語の分裂文には二通りの語順が存在する (vgl. Huber 2002; Altmann 2009)。本発表ではそれぞれを規範語順の分裂文 (z.B. *Es ist Hans, der kommt.*)、倒置語順の分裂文 (z.B. *Hans ist es, der kommt.*) とする。規範語順の分裂文とは異なり、倒置語順の分裂文は補足疑問文の答えとして通常用いることができない。そのため倒置語順の分裂文には、疑問文とその答えとなるフォーカスという関係に加えて、規範語順の分裂文にはない解釈が付与されていると考えられる。本発表では、その解釈を意外性として捉え、Bianchi et al.

(2016) の分析をドイツ語の分裂文に応用する。Bianchi et al. (2016) によれば、フォーカスは文脈上重要な要素の集合 (Kontextmenge) を喚起するが、要素間には序列が存在する。フォーカスされた要素がその他の要素に比べてよりあり得なさそうなものであった場合、意外性の解釈が生じる。

本発表では Grosz (2012) および Zimmermann (2008) に基づき、話し手がフォーカスされた分裂要素が聞き手の想定内であると考えられる場合には規範語順の分裂文、想定外であると考えられる場合には倒置語順の分裂文が用いられるという一般化を提示し、その妥当性を経験的ならびに理論的な側面から検討する。

2. 懸念標識の構成的意味論に向けて

林 則序・森 芳樹

本発表では、日本語の迂言的標識「-てしまう」に懸念用法 (apprehensive use) があることを主張する。「-てしまう」は、通常、完了のアスペクトを表すために使われ、(話者の) 否定的な態度を合わせて含意することがある。本発表では、その否定的な含意のうち特定の種類のものを、単なる「否定的な含意」(寺村 1984, 金水 2000) とするに留めず、懸念用法として特定しようとする。

「-てしまう」懸念用法は、以下の(1)のように例示される：

- (1) (ガタガタするはしごに乗っている人に向かって)
(気を付けなければ), 落ちてしまうよ!

この懸念用法は、特定の文脈によってトリガーされるものではあるが、これは語彙化された (Grice 的な意味での) 会話の含意 (Conversational Implicature) として扱い、多義的な「-てしまう」のうちの1つの意味として扱うのが妥当であることを主張する。さらに、その意味表示は、以下の構成要素から成り立って

おり、それらが統語構造において分散して表示されると考えるのが妥当であることを主張する：仮説的な推論、聞き手にとって予想外であること、被害性、適切な時制とアスペクト。これらの主張は、他の言語との対照（英語の *might*, *lest*、ドイツ語の *mögen*、*nachher*、オランダ語の *straks* (Boogaart 2009)、Ngarinyman 語 (Eva Schultze-Bendt のフィールドワーク)) によって裏付けられるものである。

3. Akkommodationspräferenzen in deutschen Konditionalsätzen

Christian Klink

Präsuppositionen sind implizierte Hintergrundinformationen, die in einem Kontext als wahr und gegeben gelten müssen, damit dieser interpretiert werden kann. Was passiert nun aber, wenn neue oder nicht bekannte Informationen vom Sprecher als gegeben in den *common ground* (Stalnaker 1978) eingespeist werden: es wird akkommodiert. Akkommodation (Lewis 1979) beschreibt eben jenen Vorgang, der bisher Unbekanntes zum gemeinsamen Hintergrund hinzufügt und dadurch interpretierbar macht.

Es wird zwischen globaler und lokaler Akkommodation unterschieden. Globale Akkommodation fügt eine Präsupposition dem gemeinsamen Hintergrund endgültig hinzu. Würde dies allerdings zu Inkonsistenz oder Inkohärenz führen, setzt lokale Akkommodation ein und tilgt die Präsupposition am Ort ihres Entstehens.

Akkommodation kann informal also als ein Mechanismus beschrieben werden, der einen Kontext so anpasst, dass dieser unbekannte oder unerfüllte Präsuppositionen aufnehmen kann.

In der Literatur der Präsuppositionstheorie scheint globale Akkommodation (Heim 1983; van der Sandt 1992; Beaver & Zeevat 2007; et al.) klar präferiert zu sein. Auch jüngere experimentelle Untersuchungen scheinen diese Präferenz zu bestätigen (Chemla & Bott 2013; Schwarz & Tiemann 2015). Um dies weiterführend zu testen, habe ich definite Kennzeichnungen (e.g. *seine Frau*) in deutschen Konditionalsätzen untersucht. Das Ergebnis dieser Studie kann die Präferenzfrage zwar nicht eindeutig klären, liefert dafür aber andere wertvolle Erkenntnisse.

4. 強勢アクセントをもつドイツ語心態詞 JA と左方領域

— 生成文法による分析

伊藤 克将

ドイツ語における心態詞は強勢アクセントを置くことができないことが知られているが、例外も存在する。心態詞 *ja* はそのひとつで、強勢が置かれた際には、置かれないときとは異なった分布を見せるため、強勢が置かれているものを別の心態詞 *JA* として扱うことも多い (Thurmair 1989 など)。例えばアクセントをもつ *JA* はアクセントのない *ja* とは異なり、*versuchen* や *ermahnen* に埋め込まれた *zu* 不定詞句内に現れることが可能である (vgl. Rapp & Wöllstein 2013)。Coniglio (2010) によれば心態詞は ForceP との一致 (Kongruenz) を必要とするが、① *versuchen* や *ermahnen* に埋め込まれた *zu* 不定詞句は vP よりも

小さい構造を持つこと (vgl. Wurmbrand 2014)、②主文の ForceP はフェイズ不可侵条件 (vgl. Chomsky 2001) により補文内の要素との一致ができないこと、の 2 点が原因で、従来の理論では *versuchen* や *ermahnen* に埋め込まれた *zu* 不定詞句内に *JA* は現れることはできないという誤った予測をしてしまう。本発表ではまず、ドイツ語の左方転移現象 (Linkversetzung) や *w* 句の連続循環移動を観察することで、ドイツ語の左方領域においては ForceP がフェイズの役割を果たしており、それよりも低い位置にある FocusP は *zu* 不定詞内の要素に接近可能 (*accessible*) であることを示す。さらに Meibauer (1994) および Gutzmann (2010) に基づき強勢の置かれた心態詞 *JA* を焦点をもつ *ja* として捉えなおし、FocusP と *JA* の一致を仮定することで、*ja* と *JA* に共通の意味を認めつつも *JA* の分布を正確に予測できる理論を提案する。

5. 語順と音韻構造

稲葉 治朗

ドイツ語の不定詞構文は、*Kohärenz* という問題とも絡み合って、複雑で未解決の問題が多く残る分野である。本発表では、その中から特に代替不定詞 (*Ersatzinfinitiv*) に関わる現象を取り上げる。この構文はある種の「例外」として扱われることが多いが、実際に以下の点において「特異」である：(i) *haben* に支配され、過去分詞形になることが予測される話法動詞 (など) が不定形で生じる、(ii) 完了形を作る助動詞である *haben* が動詞群の末尾ではなく先頭に生じる：

(1) (...) weil er heute Schokolade hat essen dürfen.

こうした現象は、理論的研究においても、不定詞構文における周辺のテーマとしてしか扱われないことが多かった。本発表では、形態統語的な側面および音韻的な側面の双方からどのようなアプローチが可能であるかを検討し、今後の研究への指針を示したい。